日本天文学会昭和 56 年度秋季年会記事

昭和 56 年度秋季年会は京都市内の京大会館に於て，A B の2会場で10月13日（火）～15日（木）の3日間にわたって開催された．講演数は会場 A 89，会場 B 85，計 174，出席者数約360名，各セッションの座長は次の方々にお願いした．

		会場 A	会場 B
13 日	午前	横山紘一，	杉本大一郎，
		若生康二郎，	小田　稔，
	午後	安田春雄，	加藤正二，
		堀　源一郎，	藪下　信，
14 日	午前	日江井栄二郎，	坂下志郎，
		柿沼隆清，	高瀬文志郎，
	午後	海野和三郎，	田中春夫，
		神野光男，	会津　晃，
15 日	午前	上西啓祐，	甲斐敬造，
		山下泰正，	高倉達雄，
	午後	小暮智一，	石田五郎，
		川口市郎，	北村正利，

会期中の 13 日の昼に内地留学奨学金選考委員会，14 日夜に懇親会，15 日の昼に理事会が開かれた．

学会だより

昭和 57 年度科学研究費補助金配分審査委員候補者

日本学術会議研究費委員会より標記の件について推薦の依頼がありましたので，本学会として評議員の書面投票により下記の方々を推薦いたしました。

第1段審査委員候補者：　藤本光昭，奥田治之，内田　豊

第2段審査委員候補者：　古在由秀，海野和三郎

なお，現在の第1段審査委員は，加藤正二，高窪啓弥，小平桂一の3氏で，昭和 56 年度で加藤正二，高窪啓弥の両氏が任期満了となります．又現在の第2段審査委員，川口市郎氏も昭和 56 年度で任期満了になります．

雑　報

岡山観測・技術シンポジウム報告

光学望遠鏡計画の議論のさなか，7月 23 日からの3日間，日本の光学天文観測の芽を育み支えてきた岡山天体物理観測所のある鴨方町の町民会館において，第2回目の岡山観測シンポジウムが9年振りに開催され，引き続いて第1回目の技術シンポジウムが同じ会場で行われた．光学観測に携ってきた関係者約 70 名の参加があった．

第1日目のはじめに光学観測の現状の紹介（山下），岡山観測所の生い立ちと 22 年間の発展の記録（石田五郎），光学と天文学の接点その展望という補償光学・画像修正を主とした招待講演（辻内），望遠鏡の制御に関して（清水 実），国内外における鏡の軽量化への足跡の紹介（冨田）があった．午後からは，本観測開始以来の 188 cm ニュートン観測の詳細な紹介（高瀬），岡山の天候（石田五郎），二次元撮像のための CCD カメラ（家），低分散分光用のグリズム分光器（高田），光ファイバーの応用（小平）などの講演に始まり，カセグレイン焦点の観測では I.I. 分光器を用いた観測（若松），ポラリメータを含んだ多チャンネル分光計（沖田），91 cm 望遠鏡における UBV 測光とスキャンナの観測（近藤），ISIT を用いた天体撮像とそのビデオの公開（磯部），があり，瀬戸内の凪で蒸し暑い午後7時まで講演が続いた．

2日目は，IDARSS の分光観測への応用についての岡山の実験（渡辺），東北大の観測と実験（田村，石井），銀河観測用新分光器の設計（岡村，清水実）があり，クーデ焦点での分光観測の推移（山崎），高分解能高効率化の提言（定金），世界に先駆けた高分散エッシェル分光の現状（辻），フーリエ分光器による赤外観測（田中），クーデ分光器用リチャードソン型イメージスライサー（山下），ステラー・マグネットグラフ計画（成相），スペックルとファブリ・ペロー干渉計の紹介（安藤）が行われた．

各種センサーの冷却システムの確立，新検出器の応用，クーデ室拡大による高分散分光の充実，拡がった天体用のカセ新分光測光器，蓄積型モニター及び TV ガイダーなど多くの機器開発が望まれるとの総括（家）をもとに討論が行われて終了した．

引き続き技術シンポジウムにおいては，技術者のための天文学解説と観測天文学の展望について，世界の望遠鏡（磯部），望遠鏡の技術的諸問題（清水実），銀河の光学観測（家），星の観測（安藤），写真測光と画像処理（岡村）の特別講演が行われた．

3日目は観測機器開発を行っている現状を，堂平観測所多色偏光装置の TV ガイダー（山口），岡山で計画中